

近江八幡市の大震災防災対策

2012年12月

財団法人都市化研究公室理事長 光多長温

1. 市庁舎移転

老朽化した市庁舎の建替え問題が以前からあったが、2012年3月にまとめられた「近江八幡市まちづくり構想—22世紀をめざしたまちづくりビジョン—」において、次のような提言を行っている。

- ① 市庁舎整備は、これからの街づくりのリーディングプロジェクトとして、環境、防災、教育、福祉などの街づくりを先導する役割を担う。
- ② 現在の市庁舎は、近江八幡駅周辺と八幡堀周辺の旧市街地との間に位置するが、新庁舎の立地場所については、現行位置から中心市街地周辺に移転することが望ましいとしている。
- ③ 新市庁舎は、より集客力や情報発信力が高く、経済的な波及効果が大きい事業に活用することが望まれる。

具体的には、大震災対策として、大災害の発生時において、他自治体の行政機能の受け入れが可能な市庁舎を建設することを検討している。通常時においては、ホール等で利用し、大災害発生時においては、災害を受けた地域の行政機能を受け入れることができるような市庁舎を建設することを構想している。近江八幡市には活断層が通っていないこともこの背景にある。

現在でも、南相馬市等からも行政機能移転の話がある。全国で6か所ほどその動きがある。この際の、資金負担を近江八幡市単独で負担するか、(受け入れ部分については)全国的希望で検討するかは議論となるところであろう。

2. 災害時における生活廃棄物の処理に備えた大野坪構想

大災害時において、大きな問題となることの 하나가、トイレ問題がある。阪神淡路大震災時には、このトイレ問題で脱水症状を起こす高齢者等が多くいたのも事実である。そこで、東南海大地震に備えて、現在休止している市内第一クリーンセンターを大災害で使用不可能となった下水道の代わりに、一定期間し尿を貯留する施設(大野坪)として利用しようとして計画している。これは、避難民により琵琶湖への汚水の流入を防ぐ効果もある。市は、この不要となった



クリーンセンターを民間に売却する予定である。

現に、東日本大震災において、滋賀県からバキューム車 15 台と物資を積んだ支援車 20 台、人員 34 名で救援活動に参加し、宮城県大崎市ではくみ取ったし尿を山形県酒田市まで運搬した実績を持っている。

この大災害時におけるし尿の処理を受け入れる施設について、運営主体及び資金問題は未定であるが（地域企業で行う動きもある）、いずれにしても、公的色彩を帯びるプロジェクトでもあり、何らかの公的資金支援を行うことが必要と考えられよう。

3. 地域力による防災拠点モデル地区整備

大災害時において、生活物資の支援活動は不可欠である。しかし、これを通常時においても備蓄しておくことは大きな負担となりかねない。そこで、通常は、商業施設として、日常の商業活動を行う一方、大災害時における生活救援物資の備蓄拠点機能をも併せ持つことを計画する。即ち、通常は、家電、生活用品、生活医療、医薬品、食料・飲料水等を販売しているショッピングセンターが大災害において販売商品を救援物資とするも考え方である（小舟木生活サポートセンター構想）。流石に、商人の町近江八幡市らしい発想である。

この詳細は今後検討することとなるが、大災害時における救援物資の備蓄機能を併せ持つとすれば、民間商店には一定の負担が生じる。また、いかなる救援物資が必要かも時代によって変化する可能性もある。そこで、そのアベイラビリティに対して行政が一定の資金負担を行うこと、及び必要に応じ、備蓄状況の把握をすること、更には大災害発生時においては、救援物資の搬出を行うことも考えられる。

4. 小学校と防災センターとの総合施設整備

小学校の新設に合わせて、地域コミュニティセンターを併設し、大災害時においては、避難民を受け入れることを想定している。平常時においては、小学校生徒を送り迎える主婦等がコミュニティセンターで生活文化活動を行い（駐車場も整備されている）、大災害時においては、地域コミュニティセンターと小学校（廊下等もかなり広い。また、和室等もある）が避難民を受け入れるものである。



金田小学校でモデルプロジェクトが実施されているが、この小学校の特徴は、各教室に「隠れスペース DENAPACE」を設置していること、学童保育所¹を設置しているこ

¹ 有料。全体生徒 920 人のうち、約 70 人が学童保育。父兄が当番を決めて管理している。

と（共働きの家庭の学童が放課後にそこで宿題等を行う。）、更には、教員室から校庭が見通せるために、放課後に校庭で遊んでいる生徒を教員がきちんと見張ることができる。但し、集団登下校のため、余り、放課後に残ることはない。

幼稚園も併設されており、幼稚園送り迎えの親がコミュニティセンターで時間を使いながら子供を迎える。そこでのコミュニティができることとなる。

学校の一部に多目的ホールを整備し、学校と地域とで利用する。学校では学年単位の集会や、文化活動、地域では地域の諸活動、文化活動等を行う。また、学校の和室も地域の人たちがお茶会等に利用している。文科省の設置基準には合致しないが、学校と地域とが一体となって、活動する仕組みと言える。

なお、近江八幡市においては、同様の小学校整備事業が他地域でも行われている。



5. メディカルツーリズムプロジェクト

長寿寺隣で医療法人がメディカルツーリズムプロジェクトを推進船としている。まず、高齢者ケアハウスを建設し、次に、再生医療の施設を計画している。更に、地域全体で食事の提供等の活動を行い。地域メディアツーリズムを推進する計画である。地元の医療法人が行政の補助を受けずに独自で推進しているところも商人の町近江八幡市らしい。



